

## 観点別学習状況の評価と評定への総括について

観点別学習状況の観点ごとの評価および評定を総括するために、次の2つの段階が必要である。

- 1 観点別学習状況の評価の観点ごとの総括
- 2 観点別学習状況の評価から評定への総括

### 1 観点別学習状況の評価の観点ごとの総括

#### (1) 単元における観点ごとの評価の総括

##### 単元における観点ごとの評価規準の設定例

<p>&lt; 単元名 &gt; 第1学年 自己紹介 グリーン先生の初授業 New Horizon English Course Book1 Unit3</p> <p>&lt; 重点を置く言語活動の指導事項 &gt; 「聞くこと」(ウ)質問や依頼などを聞いて適切に応じること。 「話すこと」(イ)自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話すこと。</p> <p>&lt; 評価規準 &gt; ア) コミュニケーションへの関心・意欲・態度 言語活動への取組 : 話し手の内容に関心をもち、間違いを恐れずに大きな声で対話している。 コミュニケーションの継続: 話題のつながりを意識して、内容を深める質問をしたり、一文付け加えて話そうとしている。</p> <p>イ) 表現の能力 正確さ: 強勢や区切りを意識して、言いたいことを正確に伝えることができる。 適切さ: プラス1文したり、相手が話した内容に質問をしたりして、内容を深めながらコミュニケーションを進めことができる。</p> <p>ウ) 理解の能力 正確さ: 強勢、イントネーション、区切りなどを手がかりにして、内容を正しく聞き取ることができる。 適切さ: 自己紹介に関わる質問に対して、確認するなど適切に応じることができる。</p> <p>エ) 言語や文化についての知識・理解 言語についての知識: 自己紹介の時に、特に伝えたい名前や地名などを強調して発音すると伝わりやすいという英語のリズムの大切さについて理解している。 文化についての理解: 相手の話を反応して聞いたり、質問をしたりしてつなげることによって、内容を深めていくことができるということについて理解している。</p>
--

#### 指導を通じた評価の蓄積 ~ 補助簿の準備と活用 ~

本単元を中心として位置付けた「自己紹介」活動から設定した評価規準をもとに、生徒一人一人の姿を評価していく。評価を蓄積していく方法は様々であるが、別表のような補助簿(授業観察用)を使って一人一人の記録を残した。50分の学習活動では、4観点すべてを評価することは不可能である。そこで、授業中のペア・トーキング、全体発表観察では、「関心・意欲・態度」の評価規準と、「表現の能力」の評価規準

と の4つの評価規準に絞って評価を行った。ペア・トーキングのような実際の学習活動中の場では、短時間で評価規準の実現状況を判断することになり、常に安定して達成している状態であれば（Aを含んだB以上）それに達していなければ（C）と簡単に記録していく。単元の終末には、これらの達成状況（ と記録したもの）を集計し、観点ごとの評価を総括することになる。観点ごとの総括を行う際、観点の評価規準が1つであれば総括は容易であるが、本事例のように複数ある場合は、それぞれを総括したうえで、観点としての評価を総括していくことになる。

< 授業観察記録用補助簿：「関心・意欲・態度」「表現の能力」に関して >

	時間		1	2	3	4	規準総括	観点総括
	評価方法		対話観察	対話観察	対話観察	対話観察		
評価の観点・規準							評価規準ごとの総括	観点ごとの評価の総括
岐阜 太郎	関意態	評価規準 取組					B	B
		評価規準 継続					B	
	表現能力	評価規準 正確さ					A	
		評価規準 適切さ					A	
西濃 花子	関意態	評価規準 取組					B	A
		評価規準 継続					A	
	表現能力	評価規準 正確さ					A	
		評価規準 適切さ					B	

#### 評価規準ごとの総括

- ・岐阜太郎さんは、表現の能力の「評価規準：適切さ」について、最初は が付いたがそれ以降安定的に（B以上）であった。さらに の内容についても「技能の質的な高まりが継続的に見られる状況」が続いたので、この評価規準については「A」と判断した。
- ・西濃花子さんは、表現の能力の「評価規準：適切さ」について、途中で（C）がみられたが、 が続き、その内容についても、おおむね満足できる状況が続いたので「B」と判断した。

#### 観点ごとの総括

- ・観点到、上記の例のように評価規準が複数設定してある場合は、それぞれの評価規準ごとで総括した評価結果を、観点到に総括していく必要がある。その際の総括の仕方については、単元の指導目標を十分に踏まえていくことが大切である。

この単元では、中心となる言語活動として自己紹介を行った。その際「ペア・班内対話観察」「全体発表会観察」「録音テープによる事後評価」を評価の場とした。そして、評価の計画に基づいて実施した評価の結果を、上記のように総括した。特に、この単元では、評価方法の工夫として、自己紹介のスピーチを録音したテープの提出を行った。同じ条件でより正確に教師の評価を行うことができた。

(2) 学期末における観点ごとの評価の総括

学期末の評価は、単元ごとの評価を総括して行う。下の事例は、1年生1学期の観点別学習状況の評価である。1学期は、「聞くこと」「話すこと」を中心とした入門期指導(Hello,English!)、あいさつを中心に行った役割演技(Unit1 ようこそ、グリーン先生)、This, Thatを使った学校案内(Unit2 学校で)、自己紹介の発表会(Unit3 グリーン先生の初授業)の4単元の学習を行い、各単元で行ってきた観点別学習状況の評価を、学期末には4つの観点の評価として総括した。ここでも、単に評価を出すだけでなく、こと評価した観点については、その原因を分析し、次単元の指導に生かすことが不可欠である。また懇談で個別指導をしたり、教育通信の所見でその理由や課題を示したりするなどして、「生徒が具体的に何を努力すればよいのか」を明確にするよう努めることが大切である。

1学期の評価の総括	コミュニケーションへの関心・意欲・態度					表現の能力					理解の能力					言語や文化についての知識・理解				
	0	1	2	3	1	0	1	2	3	1	0	1	2	3	1	0	1	2	3	1
氏名	入門期指導	役割演技	学校案内	自己紹介	1学期の総合	入門期指導	役割演技	学校案内	自己紹介	1学期の総合	入門期指導	役割演技	学校案内	自己紹介	1学期の総合	入門期指導	役割演技	学校案内	自己紹介	1学期の総合
岐阜 太郎	A	B	B	B	B	C	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	A	A	A	A
西濃 花子	A	A	B	A	A	B	A	A	A	A	A	B	B	B	B	A	A	A	B	A
美濃 和夫	C	B	B	B	B	C	B	C	C	C	B	B	B	C	B	C	C	B	C	C

(3) 学年末における観点ごとの評価の総括

学年末の評価は、下の例のように、学期末における観点別学習状況の評価結果をもとにして、その結果を総括して行う。

学年の評価の総括	コミュニケーションへの関心・意欲・態度				表現の能力				理解の能力				言語や文化についての知識・理解			
	1	2	3	学	1	2	3	学	1	2	3	学	1	2	3	学
氏名	学期	学期	学期	年	学期	学期	学期	年	学期	学期	学期	年	学期	学期	学期	年
可茂 一郎	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
飛騨 伸二	A	B	B	B	A	A	B	A	B	B	B	B	B	B	B	B
東濃 幸子	B	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	B	B	B	B

年間の評価を総括する場合、何を大切に判断するのかについて、各学校で十分に共通理解を図り、生徒や保護者に説明できるようにすることが大切である。

2 観点別学習状況の評価から評定への総括

(1) 基本的な考え方

評定が、学習指導要領に示す外国語科の目標に照らして学習の実現状況を総括的に評価するものであるのに対して、観点別学習状況の各観点は、学習指導要領に示す外国語科の目標に照らして学習の実現状況を分析的に評価するものであること、また観点別学習状況の評価は、評定を行う場合において基本的な要素となるものであるとの両者の関係を前提とすると、同じ文言で示されている観点別学習状況の評価結果を総括していけ

ば、同じ文言で示されている評価に至ると考えることが自然であり、観点別学習状況の評価と評価が以下のような対応関係にあることが理解できる。

観点別学習状況の評価		評価	
十分満足できる	A	特に程度の高いもの	5
		十分満足できる	4
おおむね満足できる	B	おおむね満足できる	3
努力を要する	C	努力を要する	2
		一層努力を要する	1

「関心・意欲・態度」	「表現の能力」	「理解の能力」	「知識・理解」	「評価」
A	A	A	A	「4」又は「5」
	.....			
B	B	B	B	「3」
	.....			
C	C	C	C	「2」又は「1」

上記の場合を除き、各観点ごとのABCが決まれば評価も必然的に決まるものではなく、様々な組合せが考えられる。

例えば、同じ「A」「B」「C」という評価結果についても、それぞれの評価結果が示す実現状況には幅があり、このことが評価への総括に反映されたりすることも想定される。

## (2) 評価への総括の方法

観点別学習状況の4つの観点の評価から評価へ総括する方法は、大まかに次の2通りが考えられる。

- ア 学年末における観点別学習状況の評価の総括に対して、上記のことを適用し、評価を導き出す。
- イ 学期末における観点別学習状況の評価の総括に対して、上記のことを適用し、学期ごとの評価を行い、それを総括する。

学習指導要領の外国語科の目標に「実践的コミュニケーション能力の基礎を培うこと」が重要な目標として設定されていることや生徒の学習段階等を考慮して、評価を導き出すことは大切である。

以上のことを踏まえ、観点別学習状況の評価結果を評価に生かす場合、各学校においては、自校における指導の重点や評価方法等を踏まえ、加味すべき要素を十分に検討して、学校として説明責任を果たすことができるよう適切な方法を定めておくことが必要である。